相撲と天理⑥

おやさと研究所
天理スポーツ・オリンピック研究室
難波　真理　*Mari Namba*

昭和61年、教祖百年祭期間中の２月８日に大相撲初場所で３場所連続優勝を果たしたばかりの横綱・千代の富士関が、本部中庭でお供えの土俵入りを行った。横綱の雄姿を一目見ようと、中庭はもちろん、北礼拝場、教祖殿回廊、東西の回廊など、大勢の人々であふれかえった。相撲史上、最も美しく華麗であると言われた千代の富士関の雲龍型の土俵入りに、見ていた人たちは「ヨイショ！」と大きなかけ声をかけていたようである。

この年、第２別館校舎新築のために移動していた相撲場が剣道場の東側に建設され、１月31日に上棟式が行われた。この相撲場は、東西礼拝場ふしんの用材をもらい、農事部生がカンナの刃の研ぎ方から始めて、棟梁の指導のもと、すべて生徒の手で造営された。この間、土俵が使えなかったため、部員たちは柔道部と合同練習をしたり、トレーニングのスケジュールを作成して、砂場での押し相撲などをしたりして、基本に少しでも近づこうと努力していた。そして、４月７日には三代真柱をお迎えして、盛大に土俵開きが催された。部員たちは真柱の前で四股を踏み、紅白戦を行って一生の思い出となったようである。

このころから新入部員が増え、森本忠善主将を中心に、新土俵での練習にも熱が入るようになった。そのおかげで、全国高校相撲選手権大会金沢大会（全国大会）への出場権を手に入れた。個人でも吉川武朋氏が出場した。全国大会から帰ってすぐ、全国高等学校総合体育大会（インターハイ）予選に向けて練習を開始した。結果は団体２位、個人で佐藤清司氏が優勝し、インターハイの個人戦に出場することとなった。佐藤氏は伊勢神宮での東西対抗戦にも奈良県代表として出場した。さらに、吉川氏が国民体育大会に出場した。この年の６月には寶國関一行が来校し、新築された土俵で相撲部員たちに稽古をつけた。また、呼び出し幸太郎、秀男の指導で農事部生に土俵作りを教え、本式の土俵に改良された。

昭和62年、２年連続で全国大会に出場する。個人も吉川氏が出場。吉川氏はインターハイ、伊勢神宮の東西対抗戦にも出場。明大中野高校の花田勝選手（後の横綱三代目若乃花関）と名勝負を繰り広げ、全国最優秀選手に選ばれた。昭和63年、全国大会に３年連続出場を果たす。全国大会では１勝をするも残念ながら決勝トーナメントに残れなかった。インターハイ予選では団体優勝。個人でも塩谷真一氏が優勝し、出場権を獲得した。

平成元年、全国高校新人相撲選手権大会高知大会（全国高校新人大会）に出場した。インターハイ予選では好成績で出場権を獲得し、本大会での活躍が期待されたが全国大会の壁は厚く完敗に近い形で終わった。平成４年は全国高校新人大会、全国大会、インターハイと、高校の主要全国大会にすべて出場を果たす記念すべき年となった。平成５年、インターハイに出場するが、初戦突破はならなかった。奈良国体終了後から、奈良県内の相撲部は休部をしたり、廃部したりする学校が増えた。そのため、県内で相撲部を抱える高校が少数となり、各大会も少しさびしい大会となってきた。平成６年全国高校新人大会に１年ぶりに出場する。５月には全国大会に出場するも予選敗退。インターハイへも出場を果たしたが、全国の壁はやはり厚く、初戦突破はならなかった。平成７年に入り、４年生が卒業すると、２年生のみのメンバーとなってしまった。しかしながら少人数で稽古にはげみ、個人戦で八木智氏が全国新人大会、全国大会、インターハイに出場する。平成８年には、部員が０となり、翌、平成９年も入部する生徒はおらず、平成10年にはとうとう休部となり、現在に至っている。

第71回全国高校相撲選手権大会金沢大会にて
（昭和62年５月、石川県金沢市・卯辰山相撲場）

教祖百年祭に、横綱千代の富士関が本部中庭でお供えの
土俵入りを行った時の記念写真。（昭和61年２月８日）

＊　＊　＊

６回にわたって「相撲と天理」を連載してきた。天理では、二代真柱が相撲が好きで、家でよく相撲を取っておられたように、大正時代には町の中のあらゆるところで相撲を取って楽しまれていたようである。三代真柱の時代にも、小学校や神社などで相撲の大会が開かれていたようである。実際に、天理高校第二部相撲部を卒業した工藤俊則氏は、真柱宅や当時の相撲大会で使う土俵を三代真柱に依頼され、いくつか造りに行ったと回想している。連載は主に大正時代、戦前の天理中学校相撲部から、戦後の新制天理高等学校第二部相撲部の歴史を中心に振り返ってきた。管内の学校の部活動として、大正時代からの古い歴史を持つ部の一つである相撲部が、現在は休部状態であるのは非常にさびしい限りである。これも世間の相撲離れの影響であろうか。いつか、古豪天理が復活することを多くの相撲部OBと共に期待をしている。

最後に、「相撲と天理」の連載にあたり、多大なるご尽力をいただいた、安藤十悦氏（天理高校第二部・昭和41年卒）、立川理氏（同･昭和49年卒）、藤本忠善氏（同･昭和62年卒）に、この場をお借りして御礼申し上げます。

［参考文献］

『荒木』第31号、天理高等学校第二部発行、昭和36年２月。
『天理高等学校百年史』第二部編、天理中学校・天理高等学校創立百周年記念事業実行委員会、平成20年９月。